

DXの成果を最大化する クラウド型データ活用基盤

— SAP HANA Cloudを中核とするデータ活用ソリューション「aidoneo®-DU」

データを蓄積するだけでは分析も可視化もできない。どのようにデータを収集・蓄積し、構築や運用コストを抑えながら有効活用できるデータ活用基盤を整備しておくかが重要だ。こうした取り組みは、ビジネスにも新たな価値を生み出していく。DXにつながるデータ活用を、運用管理負荷を軽減させながら実現するのが、インメモリDBaaS(Database as a Service)のSAP HANA Cloudである。世界中で導入が進むSAP HANA Cloudについて、国内初導入を支援したNTTデータ グローバルソリューションズ(以下、NTTデータGSL)のケーススタディを交えながら、データ活用基盤のポイントとその活用術を紹介する。

データ活用基盤の成長ロードマップは 企業の成長戦略と表裏一体

多くの企業でデジタルトランスフォーメーション(以下、DX)への取り組みが進んでいる。ここでは、「DXをどう進めるか」に焦点が当たりがちだが、「データをどう収集・蓄積し、活用できる状態にしておくか」によって、実際には実現できることは異なってくることを認識する必要がある。つまり、データ活用基盤の成長ロードマップは、企業の成長戦略と表裏一体をなすともいえるだろう。

例えば、データ活用基盤の成長期は、BI(Business Intelligence)を導入し、日次・月次レポート作成などの効率化や迅速化を図り、経営の見える化を推進する。データ活用層も一部の部門だけでなく、営業など一般ユーザーへと裾野が広がる。そして成熟期では、本格的にデータを活用するステップに入る。分析精度や効率の向上に向けて、新たな分析ツールの導入、データ連携の強化、人材育成、プラットフォームの最適化などを行うことで、付加価値を生み出すデータ活用基盤が具現化されていく。

データ活用基盤の意義は、週次・月次のレポートを出すといった観点とは別次元にある。不確実さが増す中で、データを基本とした経営状況のリアルタイム

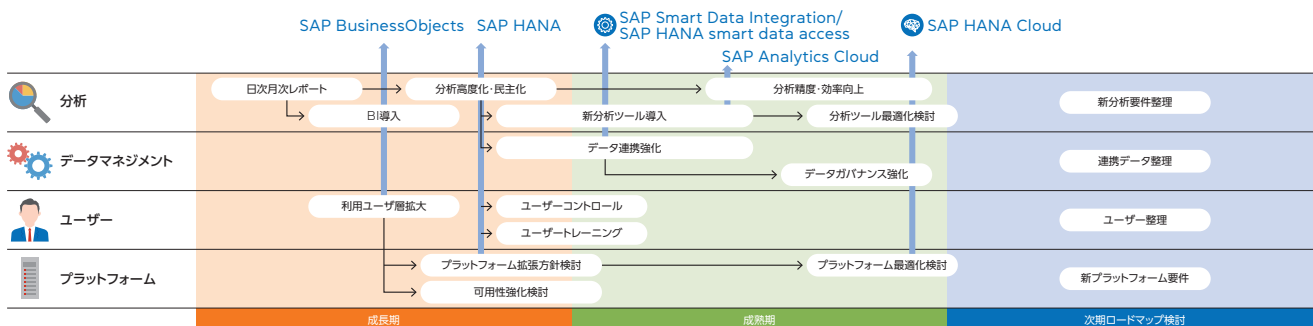
な可視化や、予測シミュレーションは、事業を展開する企業にとって強力な武器となる。また、DXにおいて、企業が所有するデータは、その活用によって社会構造やビジネスプロセスを変革する可能性を秘めている。しかし、こうしたデータを価値に変えるためには、データを蓄積する仕組みやツールの使い方、ユーザーのスキル向上など、データ活用をするための基盤のステップアップが必要となる。

そして大事な観点は、成熟期がゴールではないということだ。時代の変化や技術革新に伴って、成熟した基盤も次の成長に向けた新たなステップへと入っていく。成長、成熟、次期ロードマップの検討のサイクルをまわし続けることが、DXのデータ活用基盤に求められる。

高速処理の実現、運用管理からの解放へ SAP HANA Cloudの導入が進む理由

データ活用基盤の構築には、多くのコストや工数がかかるとわれがちだ。データ活用基盤の構築に要するコストや運用負荷を極力抑え、その分のリソースをデータ活用にあてることでDXを加速させることが重要だ。そして、

成長と成熟を繰り返して価値を高めていくデータ活用基盤の成長ロードマップ



DX推進のニーズに応えるデータ活用基盤の有力な選択肢が、クラウドによるデータベースの提供だ。その代表格といえるのが、世界で導入が進む「SAP HANA Cloud」である。

SAP HANA Cloudは、インメモリデータベースSAP HANAの機能をクラウド環境で提供するDBaaS(Database as a Service)だ。定型の小さいサイズのデータを短時間で大量かつ同時に処理するOLTP(オンライントランザクション処理)と、膨大なデータに対して複雑な集計・分析を行い、素早くレスポンスを返すOLAP(オンライン分析処理)の両方に対応する。インメモリ技術によりデータを高速処理することで、分析結果に基づく判断の迅速化や試行錯誤の回数を増やし、データの精度向上を図ることができる。クラウドのメリットを活かすさまざまな機能を備えている点もポイントの1つだ。

例えば、データの利用頻度やデータの価値に応じたデータ階層化管理機能により、性能とコストのバランスを最適化できる。また、必要に応じてCPUやメモリ、ストレージなどのリソースを簡単に拡張することも可能だ。さらに、これまで影響範囲の確認など手間と時間を要したパッチ適用も不要となり、メンテナンスの負荷を削減できる。

SAP HANA Cloudは、インメモリ技術という高速処理とともに、複雑化した運用管理からの解放を実現する。データベースに蓄積したデータをいかにビジネスに活かしていくかということに注力できるという観点で「最適解」といえるだろう。

データ活用基盤の構築から分析まで トータルサポートがお客様からの高い評価に

日本国内で初めてSAP HANA Cloudの導入支援を行ったのが、SAP ERPやSAP S/4HANAの豊富な導入と運用実績を持つNTTデータGSLである。同社は、経費や売上などオペレーショナルデータ層と、移動や行動といったエクスペリエンスデータをかけ合わせるテクノロジー層のソリューションを「aidoneo®(アイドネオ)」という人工知能(AI)などの先進技術を活用したソリューションで展開している。またデータ活用には、SAP HANA

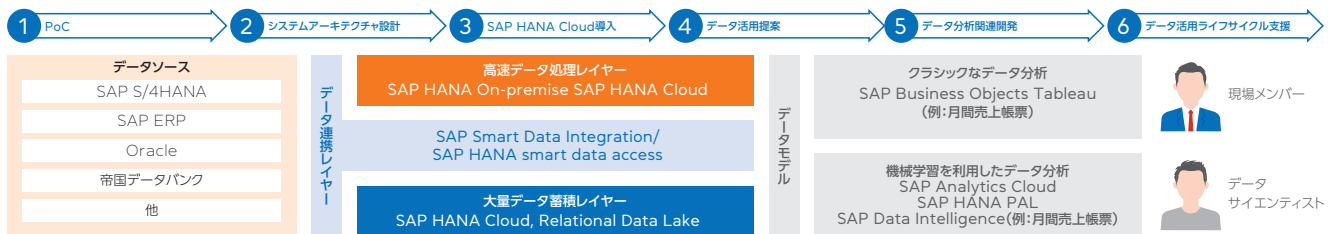
Cloudをベースとしたワンストップ支援ソリューションとしてaidoneo®-DU(Data Utilization)を提供している。PoC(概念実証)、設計、導入といったデータ活用基盤の構築はもとより、データ活用の提案、分析関連開発など、企業のニーズに寄り添いながらデータ活用をトータルに支援できることがNTTデータGSLの大きな強みだ。

NTTデータGSLによるSAP HANA Cloud導入のユースケースに、大手製造業のデータ活用基盤刷新プロジェクトがある。インメモリデータベースの高速処理の活用と合わせて、クラウドベースの情報活用ツールSAP Analytics Cloudを導入し、単純集計からの脱却と機械学習による先進的な分析の実現を目指す。また、クラウド化による継続的な最新の技術の活用や、コストの最適化、運用負荷の軽減も期待される効果だ。さらにSAP Analytics Cloudは機械学習のスキルが必要なく、ビジネスユーザが簡単に自らデータの予測分析を可能とする。売上予測や売上データに対するインサイト(気づき)が得られるなど、データドリブン経営の実現に貢献する。現在、複数のプロジェクトが立ち上がっており、今後もNTTデータGSLはデータ活用の技術支援に注力していく。

企業によって戦略や強みが異なることから、データ活用の仕方も一様ではない。業務に精通する「ビジネスのプロ」である企業と、SAP製品はもとよりAIや機械学習のエンジニアを有する「テクノロジーのプロ」であるNTTデータGSLが一体となって取り組むことで、その企業に合ったデータ活用による価値創造を実現することができる。例えば、ERP(Enterprise Resource Planning)のデータとセンサーデータを組み合わせることで新たな価値を生み出すといった、テクノロジーのプロの視点がここに活きる。

NTTデータGSLは、SAP HANA Cloud導入支援の依頼増加に伴い、リソースの増強も含めて体制強化を図っている。SAP HANA Cloudは、クラウド型データベースのため短期間導入が可能だ。基盤構築に時間をかけず、速やかにデータ活用のフェーズに移行できる。データを活用し競争優位を獲得するためには、短時間で成果を生み出す必要がある。SAP HANA Cloudをベースとしたデータ活用基盤の構築は、成長ロードマップに基づいた企業価値の最大化に貢献していく。

aidoneo®-DU はデータ活用基盤の構築から活用までを一貫して支援



株式会社NTTデータ グローバルソリューションズ

〒104-0045 東京都中央区築地5-6-4 浜離宮三井ビルディング 4F お問い合わせ E-mail: infoevent@nttdata-gsl.co.jp
<https://www.nttdata-gsl.co.jp/form/contact/>

すべての製品名、サービス名、会社名、ロゴは、各社の商標、または登録商標です。製品の仕様・性能は予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。